昭和四十一年三月

宮崎県文化財調査報告書 第11輯

1966

宮崎県教育委員会

昭和四十一年三月

宮崎県文化財調査報告書 第十一輯

宮崎県教育委員会

目　次

一、飯野町大字上江字小木原の地下式古墳調査……文化財専門員……石川恒太郎
二、木城村日子神社附近の遺跡調査報告……文化財専門員……石川恒太郎
三、延岡市および北浦村のヤッコソウ発生地調査……文化財専門員……平田正一

西諸県郡飯野町大字上江字小木原の地下式古墳調査報告書

石川恒太郎

一、古墳の所在と発見の動機

この古墳のある所は有名な元亀三年五月四日に島津、伊東の両軍が決戦を行なった木崎原の上に当る台地で、現在は畑となっている。正確には西諸県郡飯野町大字上江字小木原の二、三一八番地荻原隆義氏所有の畑で、道路より荻原氏宅に入る道の左側（西側）の畑のほぼ中央に当るところで、今年（昭和四〇年）五月初めごろ、荻原氏が耕作中、穴が開いたので発見されたもので、直ちに同町公民館より県教育委員会社会教育課に報告され調査を依頼してきたものである。

それで五月十一日同町に出張、公民館長その他の人々の案内で現地を調査したが、発見された古墳は二基で、何れも地下式古墳でありその状況は次の通りであった。

二、古墳の状態

最初に発見されたものをA墳と仮称し、後に見出されたものをB墳と仮称することとしたい。

1 A墳の状態

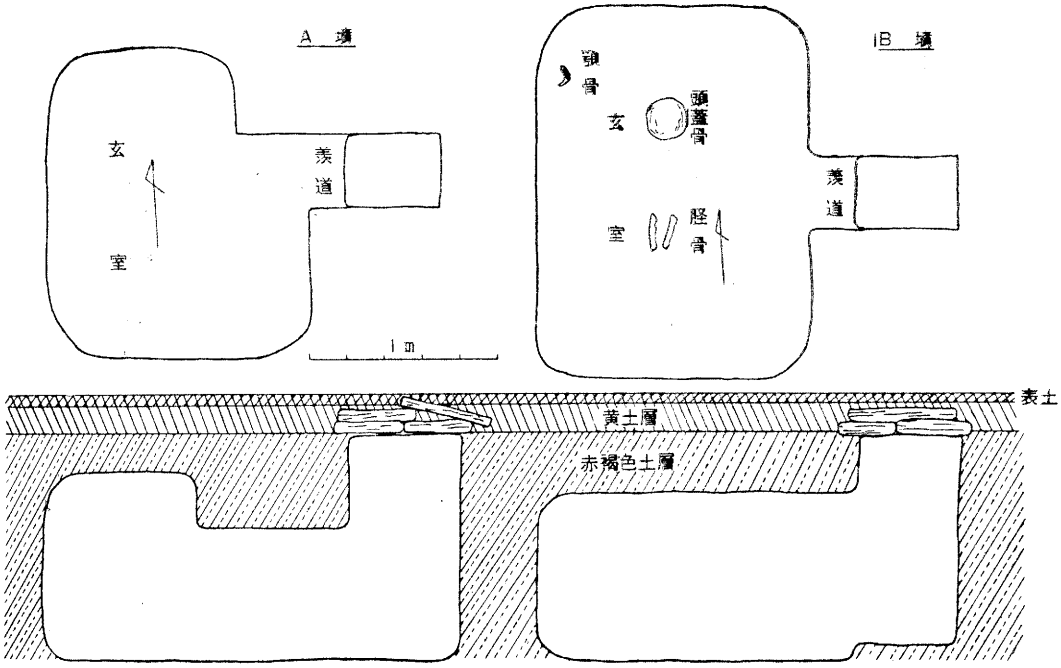
畑にはまだ何も植えてなく、植える準備がなされていたが、この畑の殆んど中央に竹を曲げて半円形にしたところが穴のあいている場所であった。

薄い黒色の表土を除くと、この地方でヘラ石と呼んでいる褐色の扁たい石四枚が穴の蓋をなしていた。そしてその周囲を見るにこの蓋石はローム質の黄土層を掘って置かれていた。石を取り去るとポッカリと竪穴が開いた。竪穴はローム層の下層をなしている赤褐色の粘土質土層に設けられ、東西五〇糎、南北四〇糎のやゝ長方形で、深さは一米二〇糎であった。蓋石が不完全なため穴があいていた程であるから黒色の表土が流れ込んで深さ六〇糎ぐらい堆積していた。

竪穴が普通の地下式古墳より小さいので、作業は困難であった。穴が狭いのでスコップの柄が閊えて掘れないため竪穴の東壁を掘り拡げた。

竪穴の底から西方に横穴を設けているが、この中にも黒い表土が一杯堆積しており、先日の雨でジクジクに湿っており調査は困難を極めた。

横穴の構造は図版に示すごとく、穴は東を口にして西方に掘られており、その構造は甚だ変っている。玄室と羨道があるが、羨道と見るべき部分は竪穴に続く幅四〇糎、奥行二〇糎の部分で、この羨道の南側の端から南方に八〇糎広くなり玄室をなしていた。しかし羨道の北側の壁はそのまま西方に伸びて六〇糎伸びたところから北方に四五糎拡がっていた。従って玄室の南北の長さは羨道の幅四〇糎を加えて一米六五糎である。そして玄室は角円方形（すみまるほうけい）をなしている。つまりこの玄



室は平面的には南壁が北壁より広いのである。

羨道の入口の高さは七〇糎で、玄室の天井もこの高さであるが、中央附近で急に高くなり、中央は高さ一米となる。

そしてこの古墳からは何らの遺物も発見することができなかった。

2 B 墳 の 状 態

この古墳から南東に約一〇米距たった所に又数枚の石組のある所が見出された。構造は前と殆んど同じである。

蓋石はローム層に掘り込まれており、石を除くと竪穴がポッカリと開いた。しかも今度は蓋石が多かったためか黒い表土の堆積が少なく、横穴の中まで覗き見られ、横穴の中には刀らしいものがあることが知られた。

竪穴は同じく赤褐色土層に掘られており、穴の大きさは幅四〇糎、長さ五八糎の長方形で東西に長く、その方位はA墳と殆んど同じである。

竪穴の底から横穴を西方に掘っているが、竪穴の延長に幅四〇糎、長さ三〇糎の羨道があり、玄室は南北に対称的に拡がり、南北二米、東西一米四〇糎の角円方形をなしていた。

羨道入口の高さは八〇糎であったが、底部は羨道から一〇糎低くなっていた。しかも天井は羨道も玄室も同じ高さであった。従って天井の高さは九〇糎であった。

玄室を見るに、前に上から覗いたとき、刀のように見えたのは竹を割いだもので、それが二本と釣棹のような竹の折れが五、六本入っていた。しかもこの竹は折れ口を接すれば一本の竿となった。

この地方の古墳を詳しく調べているという木崎原操氏の語るところによれば、この古墳は嘗て子供たちが棒でつついたということであったが、確かにつついた棒切れは残っていた。

初め竪穴の底の堆土を除いたとき、その土の中に小さい多数の骨片

と臼歯一本が見出された。竪穴に人を葬る筈はないから不審に思ったのであるが、恐らくこれはその時のものであろう。とすると子供は単に竹でつついた程度ではなさそうである。

玄室のやゝ中央北寄りに頭蓋骨があり、それから南方四〇糎ぐらいの所に脛骨片二片があり、この附近には小さく砕けた骨片が無数に散乱し、さらに西方の壁に接した北壁に近い所に下顎骨の半片があり、これには歯が臼歯から門歯までついているが、歯はみな先端が平たく磨滅していた。これによって見れば、こゝに葬られていた人は可なりの老人であったことが知られる。

このように骨片が散乱していることは、この古墳が嘗て荒らされたことを示すものであるが、しかもなお、これら盗掘者の興味をひかなかった頭蓋骨や顎骨が北寄りにあり、脛骨が南に在ったことは、この人が頭を北に足を南にして葬られていたことを示すものである。

このように骨片以外には何らの遺物もなかったが、恐らくこれは前に荒らされた時に持ち去られたものと思われる。しかもこのことは、竪穴の蓋石が立派にしてあったことと併せ考えれば子供の仕業というよりは盗掘者の所行と見るべきであろうと思う。

3　両古墳の特徴と年代

この両古墳は大体においてこの地方の地下式古墳の一般的なものであろうと思うが、その特徴は種々あるけれども、最も目立つ点は竪穴が非常に小さいこと、羨道が極めて短かいこと、および蓋石を竪穴の上にしていることの三点であろうと思う。

地下式古墳というものは南九州の特異な墓制で、日向でも西都原（西都市）以南に限られている。しかも普通の地下式古墳においては、竪穴は非常に大きく小さくても二米四方位いあるのが普通である。だから竪穴は玄室より小さくないものである。また実際にそれ位いければ、棺に入った屍体を玄室に葬ることは困難である。長さ五〇糎、幅四〇糎の竪穴から棺に入った屍体を玄室に葬ることは殆んど不可能に近い。だから恐らくこの古墳では屍体は棺に入れずに葬ったものと思われる。それでもなかなか困難であるが、このために羨道が短かくなったのであろう。

横穴古墳においても羨道が短かく、或いは殆んど羨道のないものは時代の降るものとされているが、このことは地下式にも当てはまるものであろう。

次ぎに蓋石を竪穴の上に被せていることもこゝの古墳の特徴である。普通の地下式古墳では、羨道の入口を石で塞いで竪穴の部分は埋めてしまうものである。しかるにこゝの古墳は羨道の入口には蓋をせず、竪穴も埋めず竪穴の上に石で蓋をしているのは大変な特徴であるが、これは何のためであろうか。

竪穴を埋めず、その上に余り大きくない石で蓋をしているのは、竪穴をまた使用するためであろうと思われる。現在飯野町公民館に保存されている二振の鉄製直刀は、この東側の畑から出たということで、木崎原操氏の語るところによれば、それも同じような古墳で、一方の壁に刀二振を斜めに立てかけ、その側の壁には脛骨四本を同じように立てかけて中に人骨があり、前にあつた骨を整理して次の屍体を葬ったようであったということである。このように、次の屍体を葬るのに便利なように竪穴を埋めずに置いたものとすればこれが了解されるのである。

これらの諸特徴はまた、それによってこの古墳の作られた時代をも示唆するものであって、竪穴が小さいことも、蓋をして保存するに便利なためで、普通の地下式のように竪穴が大きくては蓋ができないから、死者がある度に地下式古墳を造らねばならない。このような不便を避けるには竪穴を小さくして、これに蓋をして温存し、次の死者が生じたとき石蓋を開き、前の骨を整理して葬れば簡単である。しか

し、このことは、古墳を造って盛葬する熱意がすでに冷却していることを示すものであって、遺物が無いので確言することはできないが、古墳時代後期のものと見るべきであろう。

三、周囲の状況

この地下式古墳のある台地は集団墓地ともいうべきところで、A・B両墳のある畑の西側には畑を開いた時に切られたと思われる盛土の小形古墳の一部が残っており、また東北隅にも盛土墳の一部がある。さらにこの畑の南方道路を距てた南側の畑には盛土墳が一基残っている。だからこの地方には多数の古墳があるものと思われる。

「宮崎県古墳台帳」に記す飯野町の県指定古墳は十八基で、このうち円墳が五基、他は地下式古墳である。その字別内訳は建山(円墳一、地下式五)小木原(円墳一)鳥越(円墳二、地下式一)遠目塚(円墳一)中柵(地下式七)である。

しかるに同町の前記木崎原操氏が確めたところによると次のようになっている。

小木原古墳郡発見場所

基数	地主名	地目	番地
二	吉田貞	宅地	二三二八番地
三	富田繁	〃	二四一三のイ
一	富田哲夫	〃	二四一三
二二	荻原隆義	〃	二三一八
二	久木元強	〃	二三一七
四	赤瀬川親俊	〃	二三一二
四	谷口忠男	〃	二三〇九の一
一五	藪清助	〃	二二六五
四	藪字八人共有地		一反四畝
二	藪清助	畑	宅の後ろ
四	赤瀬川親俊	〃	
一	福瀬退吉	〃	
五	吉田宗衛門	〃	
四	谷口功	〃	
三	新原留吉	〃	
三	永田佐市	〃	
七九	合計		

県指定の小木原の一基の円墳は、前に記したこの両墳の南方にあるものと思われるが、地下式は全然指定してない小木原部落に、この如くなお七九基が存するわけで、そのうち最も多いのは荻原隆義氏所有の宅地で二二基あるという。それはこの二墳(AB)を除いて二〇基であり、多くはこの両墳のある畑とその東側の麦の作ってある畑ということである。即ちこの土地が集団墓地であったことが知られるのである。

従って今後も耕作の間に見出されることが多いと思われるので、その都度報告するよう依頼し、AB両墳は耕作に差閊えるので埋め戻して帰った。

木城村遺跡調査報告書

石川恒太郎

児湯郡木城村教育委員会より同村岩戸原の上方日子神社附近の山を開いた時多くの石器土器等が発見われたといってその一部を持参して調査を求められたので、昭和四十年十一月十八日同村に行き現地を調査した。

現場は日子神社下の開拓地で、神社のすぐ下の元別当寺があったというところから下の方の山の傾斜地を段々畑にして牧草地とする計画で、ブルトーザーをもって整地したもので、この地の高さは標高一二〇米位いであるが、眺望すこぶるよく山狭を縫うて流るる小丸川や海はもちろん、遠く東児湯一帯を眼下に見ることができる。日子神社については「日向地誌」に、高城村の部に、

「日子神社

村社岩戸ノ西北隅ニアリ社地広八畝九歩瓊瓊杵尊ヲ祭ル例祭ハ旧暦九月二十九日ナリシカ明治六年癸酉以来ハ一定セス」とある。

従って祭神は瓊瓊杵尊で、嘗て村では祭典を盛大にしたらしく、参道に桜樹などが植えられている。御神体として鏡があるとのことであったが蜂が巣を造っていて開くことは危険ということであったから拝観することはやめた。

一、寺屋敷附近の遺跡

別当寺があったという所の附近から埴器の破片が多く見出されていたので、ここを調べたが、ブルトーザーで整地して牧草を植えている赤土の上に点々と土器の破片が散在していた。この山の土は赤褐色で、上に極めて薄く腐植土が蔽っているが、赤褐色といっても所によっては朱色を呈しているところもあり、遠く眺めても赤い土色が特色を示している。

土器片を探すうち、山を切り下げている断面に木炭片と土器片とを含んでいる黒い部分のあるのを認め、さらにその面を削り取ってみると、東と西に柱穴（ピット）と思われるものが二つあるのを認めた。西側のピットは直径三〇糎、深さ五〇糎、東側のピットは直径三〇糎、深さ一米で、この両ピットの距離は四米三〇糎であった。これが嘗ての床面と思われ、土器片や木炭粉がこの面にあった。そして西方のピットから一米東に寄ったところに炉跡と思われる木炭粉や土器片の多いところがあった。しかしすでに大部分を破壊されているので全貌を知ることはできなかった。だが床面は昔の地表と殆んど同一面上にあるから、この住居址は平地住居であって竪穴ではなかったことが知られる。

土器は小さい破片だけで、完形品を見出し得なかったが、底部が多く、浅い皿形の埴器が多いようであった。底部は平底であるが、高台は極めて低く、ただあるという程度のものが多かった。

この山には神社の裏側などに湧水があるので生活には不便はなかったかと思われる。

なおここで同村の人が有孔石器を一個発見していることは注目に値

する。これは直径五糎ぐらいの黒味を帯びた石の両面を平滑にして中央に孔を穿っているもので、いわゆる有孔円板であるが、その一面に絵画らしいものが線刻されているけれども、絵か文字か、また何の絵か明らかでない。この有孔円板は祭祀遺跡に特有のもので、鏡の模造品で孔に紐を通して榊に掛けて神を祭ったものと言われているから、前に記した住居址らしいものに浅い皿形土器が多かった点と合せ考えれば、前の家は住居址というよりは神殿か、または神職（巫女）などの住家か、何れにしても祭祀に関係の多い遺跡と見るべきではないかと思うのである。それにしても興味ある遺跡である。

二、メンヒルとストンサークル

これから数段だんだん畑を降った西方の外れ、すなわち未だ開拓されていない所で、日子神社への参拝道の傍らに高さ一米ぐらいの自然石が立っており、この石をめぐって周囲に大きな石が置いてある場所がある。

この山には例の「朝日ただ刺す夕日日照る、黄金千両、朱千杯」という伝説があり、この山に黄金（金の延べ棒とここでは言っている）千両を掘り出そうというので、最近土地の人がこの石の下を掘ったらしく、横にある石の下が古墳の玄室ぐらいに掘ってあり、ために横の石は二つに割れて一方は穴に落ちていた。松の根が石を抱いており、まだ掘ってない部分を少しボーリングしてみると、中央の立石をめぐって石が置いてあることが知られた。すなわち立っているのはメンヒル（立石）であり、周囲の石はストンサークル（磐境）で、古代の宗教的な遺跡であることが知られる。

このことは前の遺跡と比べても極めて興味あるもので、村教育委員会では掘った者や土地の古老に聞いて、動いている石をもとの通りに置いて保存するといっているから、その場合は適当に指導する必要があるように思う。

三、石器の発見地

右の立石のあるところから東方に、その高さの段々畑を行くと、谷間に行き当るが、この部分でさきに石斧と縄文土器片が見出されたということであった。この縄文土器片は山形の押型文であったが、石斧は頁岩の一部を両面から剝いで柄部は自然の円味を残したものと、一つは両面から全体を打ち剝いだ大まかな打痕をもつもので、先土器時代の敲打器を思わせるものである。

しかもこの土地の状況を見るに、この附近は礫層が深く現われているので、これらの石器は、この礫層の上にあることが知られる。この日表面で見出したものはナイフ状の石器と、叩石と見られるもの、および弥生式土器の表面に平行線を有する深鉢形土器の破片であったが、石器に赤土が附いていることを見れば相当面白いように思われるが、層位をはっきりし得ないことは遺憾である。今後注意すべき場所であろう。

これらの物とともにさらに注目すべきは同村大字高城字ニキミダニで巨大な動物の歯の化石が発掘されたことである。その地点は古墳の多い山塚原の下で、川に面した道路の切取面である。県立博物館に持って行って鑑定を求めようといっている時、発掘者が取りに来たので返したというので、その家に行って見た。しかしすでに高校生が学校に持って行ったということであったから、その所在を調べてもらうように村教委に頼んで置いた。

実物を見なければ判らないが、村教委の人々の語るところによれば、大変大きな動物の歯の化石であったというから、マンモスか、またはナウマン象の歯かも知れないのである。すでに本県では西都市都於郡城址の下で、妻高校の旭吉氏がナウマン象の歯の化石を発掘した

というからここにもないとは言えない。もしそれがマンモスかナウマン象の歯であるとすれば重大な事実であり、この地方に先土器時代の石器があっても良いこととなる。そういう意味でこの事は学問上重大なことで、そのような発掘物が闇から闇に高等学校などに持ち去られるということは観過する訳にはいかない。徹底的に調べて所在をつきとめそのものを取り返すべきであると考える。

四、その他

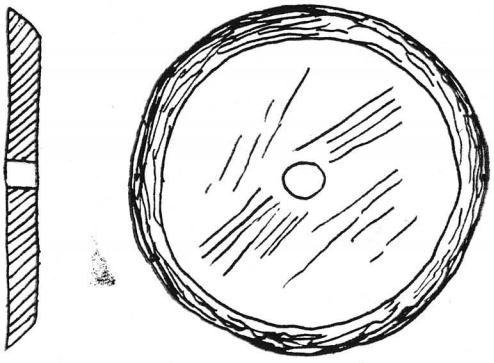
途中で見聞したものに毘沙門堂があった。道路のすぐ傍らで自然の洞穴に毘沙門像が祀ってあっが、洞穴は美事であるが、毘沙門像は幼稚な作である。この山の裏側で経筒が発見され、経巻は読めないようになっていたが、経筒は銅製でこの地方の人が持っているということであった。

また木寺部落にある観音像はもと日子神社の別当寺に安置されていたものを、明治初年の廃仏毀釈に当ってここに移したものと伝えられている。本尊と両脇侍があり、本尊は手が欠損し、腐朽甚だしいが、造りは立派であり、嘗て河井田政吉氏が新納氏を伴ない来って鎌倉時代の作と言ったという。惜むらくは余りに腐朽が甚だしく、両脇侍に至っては全く棒のようになっている。本尊は立像で高さ七十九糎（台座とも）である。

その他調査すれば本村には種々の遺跡があるらしいが、時間がないので辞去して帰った。

押型土器片拓影

有孔円板見取図



延岡市および北浦村のヤッコソウ発生地

一、熊之江の発生地

所在地　延岡市熊之江町字丸田通山一七四一（熊之江神社社叢）
地　目　山林
面　積　約九三〇平方米（三〇米×三一米）
所有者　森　正　晴

現　状　このヤッコソウ発生地は熊之江神社の社殿裏側にあたる樹令二〇―三〇年生のシイノキ社叢林内である。社叢構成の植物は、上木としてタブノキ、ホソバタブ、コガノキ、コジイ、イタジイの喬木があり、下木にはヤマビワ、サカキ、カクレミノ、ヤマウルシ、コクサギ、タイミンタチバナ、クロキ、クチナシ、ムラサキシキブ、ヤブツバキ、ルリミノキ、ヒサカキ、イズセンリョウ、センリョウ、タラヨウがある。蔓性の植物にはサネカズラ、サカキカズラ等があり、地床にはイシカグマ、オオカグマ、アリドウシ、シュンラン等がある。林内はやや薄暗く木もれ日が僅かに投入する疎林の乾燥山地である。発生の社叢は西斜面にあたり、傾斜は三〇―四〇度位で、土質の母岩は砂岩で風化した赤土の壌土が地床を作っている。標高は僅か五〇米位の平地林である。ヤッコソウ寄生のシイ類はコジイおよびイタジイの両種でいずれも壮年期の樹令であり、これらの落葉はかなり地床を被覆している。発生面積は既述の如く約一〇アールに及ぶ。ヤッコソウはこれら寄生木の株元から四―五米範囲内は密に群生し漸次株元を距って疎生となる。発生するシイノキは六株あり、株間の発生は認めない所がある。

由来、このヤッコソウの発生が広く世に知られたのは熊之江中学校の中川一重教諭の発見調査による。同氏が調査に至った経緯は次のようである。昭和四〇年一一月七日NHKローカルニュースで宮崎市内海のヤッコソウをテレビ放送したことに始り、同氏がたまたま母のチユキさん（六二才）とこのニュースを見たところ、チユキさんからこのようなものは昔熊之江神社の森に沢山あったと知らされた。早速昔発生したという神社の社叢を調査したところ、一本も見当らなかったので、神社の裏のシイ樹林を詳細に調査したところ今回の発生地において多数のヤッコソウを確認することができたのである。その昔発生したといわれたシイ樹林は神社参道の東側にあり、当時は老木で広範囲に多数の発生を見たようである。このシイ林は昭和二〇年の終戦前後の大台風によって全部枯損し、現在は萠芽からなる一四―五年生の幼令林である。寄生木のシイの老樹の消滅と同時にヤッコソウの発生も中絶したと思われる。部落の古老の話によれば、昔神社の東南面のシイは大木からなり、沢山の発生を見たということである。山中に発生したこのヤッコソウは、その奇形のために子供達は薄気味悪がり足先で踏みにじっていたという。現在の発生地と昔時の発生地とを対比して見ると、この神社の社叢全域が広いヤッコソウの発生地であって、時代とともにその発生地を寄主木と生命をともにして変遷しているものと思われる。

中川氏はこの発生地の北へ七〇〇米距る大宮司良の林中にも発生すると聞かれていたので、同地を訪れ林内を課査したがヤッコソウは認められなかった。この樹林はイチイガシ、アラカシおよびヤマビワを主木とする林で、ヤッコソウの発生とは無関係のものと思う。

二、須怒江の発生地

所在地　延岡市須美江町字赤下（須怒江神社社叢）
地　目　山林
面　積　約一〇アール（三四米×三〇米）
所有者　森　正元
現　状　発生地は須怒江半島の西側斜面で標高は約五〇米位あり、須怒江神社のすぐ裏の社叢内である。神社裏から細い山道を僅か登るとその右手のシイ樹林が発生地である。この社叢はかなり古いもので喬木にはシイノキおよびイタジイがあり、熊之江神社の社叢と同じくシイ樹林でヤッコソウの発生には好適している。これら喬木は直幹形で樹高一七—八米、胸高径七〇—八〇糎のもので、板根がよく発達している樹令五—六〇年生のものである。下木はヤマビワ、アヲガシ、バリバリノキ、タブノキ、ヒサカキ、サンゴジュ、イスノキ、アラカシ、ヤブツバキ、タイミンタチバナ、ヤツデ、クチナシ、カゴノキ等で、地床にはサンキライ、ウラジロ、オオカグマ、ナギラン、センリョウ、アリドウシがあり、急斜面ながら落葉がかなり被っている。陽光は僅かに射入する薄暗い乾燥の林内を作っている。ヤッコソウの発生は林内にあるシイノキの株元に群生し、寄生木は五本位であるが、熊之江のものより大木であるためその発生も極めて多い。このヤッコソウ群には多数のスズメバチが集っていた。

由来、この発生地は前記熊之江神社の社叢発生地が確められてから続いて発見された。熊之江中学の生徒永田誠（一五才）君が、熊之江神社にあるヤッコソウは須怒江にもあると報告したので、同校広川弘美教諭は日曜を利用して同君等を伴ない現地調査を行ない、初めてその所在を確認された。なお同地須怒江部落の甲斐清六（六二才）氏の言によれば、同氏が一五・六才の頃はよくこの神社の森にラン（ナギラン）を採りに出かけていたが、社叢に続く林を伐採中地面に奇妙なものが発生していたことをその頃から知っていた由である。当時はこの地方によく見られるアカヤンモチ（ツチトリモチ）と思いこんでいたという。しかし破砕してももちがとれないので不思議なものだと気づいてはいたということである。同氏は昔から山猟のため広くこの地方の山林を歩き廻っているが、何処でもヤッコソウは見かけたことがないという。聞く所ではこの社叢のシイノキは以前から神社改築のための伐採計画にのっているということであったが、この度の発見によってヤッコソウ保存のための寄生木として永久保存したいものである。

三、市振の発生地

昭和四一年一月八日付北浦村教育長児島享氏から宮崎県教育長宛ヤッコソウ発見届があった。添付の写真を見ると明らかにヤッコソウであった。発生現状についての詳細は記されていないが、記された要件のみ記しておく。

所在地　東臼杵郡北浦村大字市振四七五（市振神社社有林）
面　積　一平方米範囲で五ケ所、他にも発生あるものと想像される。
発見者　北浦村大字市振　塩　月　治　重

四、保存の要件

ヤッコソウは、その形状が珍奇な稀産植物で、本種は日本の太平洋岸沿いの暖地に限って断続的にのみある寄生植物であって、学術的に貴重な植物とされ、古く発見された宮崎市野島のヤッコソウはその群落の大なることで特別天然記念物に指定されている現状である。日本におけるシイノキおよびイタジイの分布は広いが、ヤッコソウの発生はその寄生性の弱いため極めて珍しいものとなる。この度の延岡市および北浦村での発見はその保存のためにも幸いであった。これら

の発生地の規模は宮崎市野島のものを凌ぎ、将来群落の拡大も大いに期待される有望な発生地である。南北浦島の山野は続く限り草地と矮性林で、稀に点在する老令樹叢は限られて神社の社叢である。ヤッコソウの発生地が等しく神社の社叢であったことは、社叢がいかによく過去の植生の歴史を伝えてきたかを物語っている。日本のヤッコソウ産地には従来次の所が知られている。

鹿児島県日置郡東市来村

宮崎県宮崎市野島

宮崎県宮崎郡清武町舟引

宮崎県宮崎郡高岡町穆佐および中山

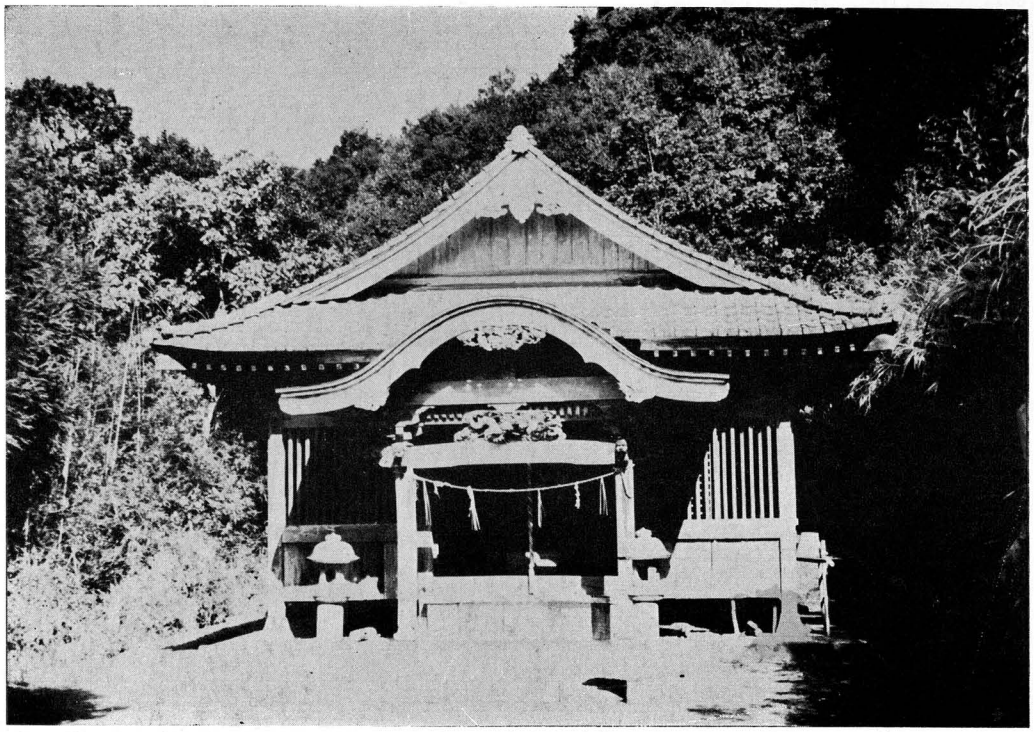
高知県幡多郡月灘村姫の井

高知県高岡郡横倉山

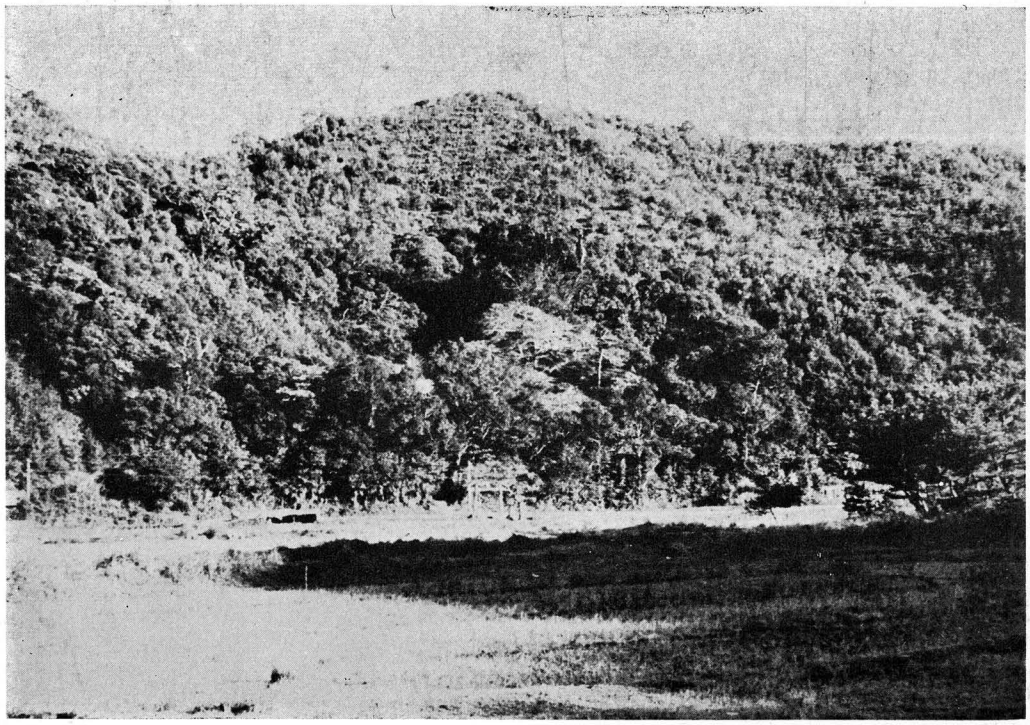
高知県安芸郡室戸町西寺

高知県安芸郡佐喜浜村

これら産地の内海岸から一五粁内外距った所は高知県の横倉山と宮崎県高岡町で、他はいずれも海岸に近接の場所であるが、概して高知、宮崎および鹿児島三県の太平洋沿岸のシイ類の樹林である。新に宮崎県延岡市および北浦村の産地を加えてヤッコソウの発生地帯としてこれら産地を天然記念物とし、学術上の参考資料として保存すべきであると思う。



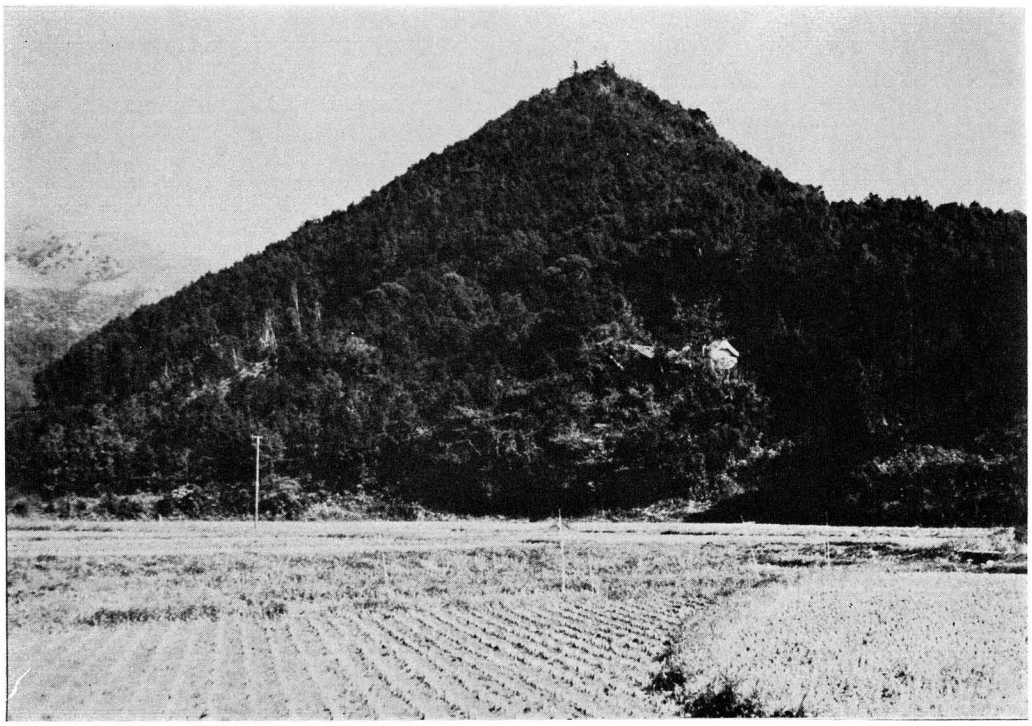
熊之江神社とヤツコソウ発生の樹林



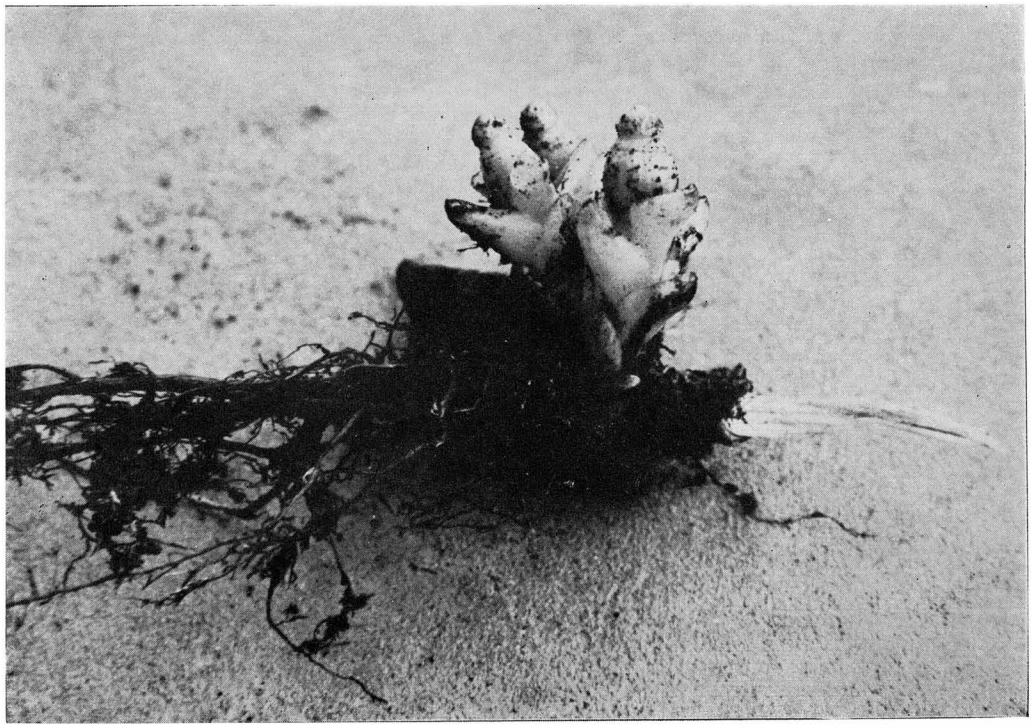
ヤツコソウ発生の須怒江神社社叢

熊之江神社社叢のヤツコソウ群生(1)

熊之江神社社叢のヤツコソウの群生(2)



ヤツコソウ発生の熊之江神社社叢



須怒江神社裏山に発生のヤツコソウ